新入生保護者と教養学部長との懇談会
2017.4.15 （土）10：30～11：00
於　駒場Ｉキャンパス 900 番教室

「〔講演〕駒場の魅力」

石田　淳

《東大駒場友の会》にご入会いただいた、今年度新入生のご父母の皆様、駒場キャンパスにようこそおいでくださいました。教養学部を代表して、心から歓迎の言葉を申し上げます。

武道館での入学式でお祝いの言葉を申し上げてからまだ三日というのに、ご父母の皆様の前に再び登場して講演などするのは、「挨拶も仕事の学部長」としても、あるいは「挨拶が仕事の学部長」としても、流石におこがましくも感じられるところではありますが、「ご父母と教養学部長との懇談会」という今回の企画趣旨に免じてどうかお許しいただきたいと思います。

それにしても入学式と言い今日の懇談会と言い、好天に恵まれました。どうか皆様にはこれで幸運を使い尽くさないようにお気をつけください。入学式の式辞は平日バージョンでしたが、今日の挨拶は週末バージョンで参りたいと思います。

さて皆さんをお招きした駒場の春は、入学前の行事とともに始まります。今年の場合、3 月 29 日から、健康診断、入学諸手続き、学部ガイダンス、サークル・オリエンテーション、オリエンテーション合宿といった一連の行事が一週間続き、気付いてみるといつの間にか 4 月 5 日の授業開始日を迎えていた、という新入生が例年のように多かっただろうと想像します。

その 4 月 5 日には、駒場キャンパスのソメイヨシノが授業開始を待っていたかのように花を咲かせておりました。正門右脇の守衛所の先にポストがありますが、その赤いポストの背景を淡く彩るソメイヨシノもまた 4 月 5 日には花をつけて学生たちを迎えてくれていました。

ここで、今年の新入生にとっては桜の開花と新学期の開始が重なって幸運でした、ということを申し上げたい訳ではありません。駒場が侮れないのは、駒場の樹木には樹木プレートがついている、そればかりか、個々の樹木を識別する樹木ナンバーまでついており、キャンパス内の樹木配置図を開くとその位置を正確に特定することまでできるからです。因みに友の会のウェッブサイトを開いて、スクロールしていただくと、「駒場の樹木」というタブがあり、これをクリックしていただくと、正門わきのソメイヨシノは「樹木ナンバー1872 のソメイヨシノ」だとわかるのです。

それは結構なことで、それが駒場のちょっとよい話であるのはわかるけれども、それが

いったい友の会と何の関係があるのか、と依然として訝しがっておられる方がいるかもしれません――できればもう少し素直に感心していただきたいのですが。

侮れないのは駒場だけではなく、友の会もこれがなかなか侮れないのです。というのも、駒場の樹木に樹木プレートがついているのは、実は友の会のご支援ゆえだからなのです。この結果、期待と不安いっぱいに正門を通り抜けた新入生たちが、あ、ソメイヨシノ、と認識した瞬間から、駒場の教育に対する友の会のご協力は始まっているということになります。

話の枕はこのくらいにしましょう。

この 900 番教室は戦前の旧制第一高等学校時代の講堂で、当時はここに一高の一学年の学生が一同に集うことができました。ですから一高生が一体感を感じることのできる場所だったのだろうと思います。この 900 番教室の上空から駒場キャンパスを俯瞰すると、幸いなことに駒場は依然として落ち着いた緑の中にあります。視野を広げると、駒場の緑は南西の駒場野公園と北西の駒場公園の緑ともつながっています。駒場キャンパスの中央には、正門を背にして正面に時計台のある旧本館、これが現在の 1 号館で、その東西の両翼に、旧図書館（現在の博物館）と私たちが現在いる旧講堂とが配置されています。旧本館、旧図書館、旧講堂は、1930 年代の一高の面影も感じられる建物です。かつて一高キャンパスだった関係で正門の戸には、旧制一高の校章が残っています。この校章は柏とオリーブの葉を模したものです。オリーブの和名が橄欖で、これがキャンパス内のレストランの名前になっています。一見関係がないと思われる事物がこのようにつながっているのです。ちなみに、駒場公園は、日本近代文学館の所在地であるとともに旧前田家の洋館と和館の所在地でもあります。駒場から本郷へは農学部が移り、本郷から駒場へは旧制一高と前田家が移った形になっています。

さきほどキャンパスの桜に触れましたが、キャンパス北西部のグランド脇に桜並木があります。これは東京オリンピックの際に練習場となった駒場キャンパスに東京都から寄附されたものです。

さらにちなみにと、キャンパス豆知識を私が得意気に披露しますと、このあとに続くキャンパスツアーでガイドをしていただく現役の先生方の領分を侵すことになりますから、学部長としてそのような大人気ないことは控えることにしたいと思います。実情を吐露しますと、私も自分自身がこのキャンパスで学生時代を過ごしたころはこのようなことは建物の来歴など知りませんでした。

駒場にはキャンパスが二つあり、教養学部・大学院総合文化研究科および理学部数学科・大学院総合文化研究科が位置するのが駒場Ⅰキャンパス、その西にあるのが駒場Ⅱキャンパスで、そこには生産技術研究所（生研）と先端科学技術研究センター（先端研）があります。

この駒場Ⅰキャンパスを共有するのは、前期課程 2 学年分の学生だけではありません。

駒場は三層から成っています。第一層が学士課程の前半部分にあたる前期課程。次に第二層がその後半部分にあたる後期課程。そして第三層が大学院です。これに教職員を加えると、総勢 9,000 名を超えます。これだけ多彩な面々が縦横に行き来する駒場キャンパスは、春の入学行事、秋の駒場祭、そして年度末の卒業式・学位記授与式など、一年を通じて実に豊かな表情をみせてくれます。

表情が豊かなのはキャンパスの自然だけではありません。当然のことながら、学生の表情がそれよりもはるかに豊かでなければなりませんし、たいていにおいて実際にそうであると思います。

大半の学生は自覚するところではあるとは思えませんが、教員は学生の表情を観察しています。教室では、多数の学生に一人の教員が向き合います。その多対一の関係で、学生からすれば、自分たちこそ教員を観察しているのだと認識することはあっても、自分たちが教員に観察されているという意識は希薄です。動物園でサルを観察しているのは観客である自分たちであって、まさかサルに観察されているなどとは思いもよらないというのと同じ構図です。

脱線しましたが、学生の表情を観察していて嬉しいのは、一見関係がないと思われる複数の事物、事象の間に関係があることに気付くときです。

御父母のみなさまも、大学生活を過ごす中でご子息・ご息女の知的世界が広がっていくことを感じられることでしょう。ときどき、ご子女の知的世界の拡大を応援したいという親心からか、定期試験が終わるやいなや旅行にでかけたご子女のかわりに、レポート提出を代行されたり、『履修の手引き』をもって教務課窓口まで科目登録の質問にお見えになったりするご家族の方もおられますが、学生の自立を促すためにも、そこまでは応援いただかないようにお願い申し上げます。

人間の知的活動の地平が広がるにつれ、大学における研究・教育は専門分化し、一段と多様化して行きます。そうであるからこそ、学問領域の枠を超えて（「超域」）、あるいは学問領域の間を行き来して（「学際」）、断片的な知見を連結する／統合する総合的な知的探究への活力が生まれます。つまり、知的関心の多様性が、知的探求の一体性を生み出していきます。というのも、断片的な知見を相互に関連づけて理解できなければ、一つの問題の解決を意図する試みも、他の問題の発生につながりかねないからです。たとえば、エネルギー供給から社会保障に至るまで、持続可能性が問われる問題について考えてみれば明らかなように、現世代の問題解決の試みも、次世代に「負の遺産」を残しては意味がありません。

キャンパスに関係するところで、具体的な例を挙げてみましょう。ご父母の皆様は、駒場キャンパスにおける教育施設の老朽化の問題には大きな関心をお持ちのことでしょう。さきほど、桜並木は東京オリンピックの際に練習場となった駒場キャンパスに東京都から寄附されたものだと申しましたが、その東京オリンピックの際に整備されたのがキャンパ

ス北東部のトレーニング体育館で、まだ現役です。私は 1964 年の東京オリンピックの年に 2 歳でしたが、まだ現役です。トレーニング体育館の老朽化はとても他人事とは思えません。

このトレーニング体育館のみならず、老朽化する研究教育施設の改修などを検討するには、施設整備の課題が複合的なものであることを十分に認識したうえで、総合的な判断を行わざるを得ません。

施設整備を通じてキャンパスの共通の利益を実現するには、少なくとも、（1）計画の必要性（計画なしに、教育・研究等の水準維持と「安全管理」の責任を果たせるか)、（2）計画の適当性（計画によって、大学の本体業務に支障が生じないか)、そして（3）費用の妥当性（計画によって、維持管理の後年負担等、過重な財政負担が発生しないか）を十分に考慮して、特定の一面に偏ることなく、総合的な検討を行うべきでしょう。

私は、教養というものの本質は、断片的な知見を連結する／統合する総合的な知的探究にあると認識しています。教養というのは、表面的な雑学的知識とか会話における小ネタとかではありません。教養は、多面的な現実を総合的に評価することを可能にする知の奥行き、広がりといったもので、人間の的確な判断力の基盤を成すものであると考えます。

学生は勉強というと、未だ知らないことを知ることだと考えがちです。それも大切ではありますが、それ以上に、既に知っていることを互いに関係づけて理解することが大切です。私たちは多面的な現実を生きています。その現実を生き抜くために必要になるのが、一見関係がないと思われる事物や事象の間の関係を理解する能力で、その総合的な判断力の基盤が教養ではないでしょうか。

駒場における後期課程、大学院の組織名称をご覧いただければ一目瞭然ですが、駒場の知的活動のキーワードは、多様性の中の一体性を表す「総合」、「統合」、「相関」、「学際」、「国際」等の修飾語にほかなりません。

知的な多様性と一体性は、長い歴史を持ちながらも老いることのない駒場キャンパスの活力の源泉であり、それが「駒場の魅力」にほかならないと考えております。